

第 32 章

アルマ 40 - 42 章

はじめに

人は死ぬとどうなるのだろうか。コリアントンも同様の疑問を持っていた。アルマ 40 - 42 章は、アルマが不従順な息子コリアントンに与えた勧告が中心となっている。コリアントンの疑問に答えて、アルマは霊界や裁き、復活、回復の律法、罪人に下る罰について教えた。コリアントンへの教えの最後に、アルマは、悔い改めも罪も律法も罰もなかったとしたら人生はどうなるかという疑問に答えている。アルマが息子に与えた答えは、幸福の計画や神の正義と憐れみ、それらが人の永遠の進歩に与える影響についてわたしたちが理解するヒントにもなる。

注解

アルマ 40 : 4 - 10 「神にあってはすべてが一日のようであり」

• アルマは、復活についてコリアントンに証^{あかし}してから、すべての人類の復活の時期についてはよく分からないと述べている。アルマにとってそのようなことはどうでもよかったのである。「神にあってはすべてが一日のようで……ある」と述べている（アルマ 40 : 8）。預言者ジョセフ・スミス（1805 - 1844 年）は、神にとって「過去も現在も未来もすべてのことが明らか」であり、「またそれらは絶えず主の前にある」ことを示した（教義と聖約 130 : 7）。

十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926 - 2004 年）は、物事は神の方法で行われると述べている。

「神はこの地上において現世の時が始まるはるか前から贖^{あがな}いの業に携わっておられ、また現世の時が過ぎ去ってからもなおその業に携わられる（教義と聖約 88 : 110 ; アルマ 40 : 8 参照）。……」

幸いにして、物事は人の方法ではなく、『〔神御〕自身の方法で』行われる（教義と聖約 104 : 16）。そして、時が始まる前からある神の目的、神の忍耐、神の力、神の深い愛は、時が過ぎ去った後にも存在するのである（教義と聖約 84 : 100 ; アルマ 40 : 8 参照）。

これらの真理およびその他の真理は、パウロが『神の深み』と呼んだものの中に含まれる（1 コリント 2 : 10）。」（A Wonderful Flood of Light [1990 年], 50, 58 - 59）

預言者ジョセフ・スミスも次のように述べている。「大いなるエホバは、救いの計画に関してこの地上に関連のあるすべての出来事を、地球が存在する前、すなわち喜びのために『明けの星〔が〕相共に歌〔う〕』前から深く考えておられた。過去、現在、未来は、主にとっては一つの永遠の『現在』である。」（History of the Church, 第 4 巻, 597）

アルマ 40 : 11 人の霊はすべて「彼らに命を与えられた神のみもとへ連れ戻される」

• 人は死ぬと神の前ではなく霊界に行くとするれば、アルマの言葉はどのように解釈したらよいのだろうか。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長（1876 - 1972 年）は、アルマは必ずしも神の前に連れ戻されることを言っていたわけではないと説明している。「わたしの解釈では、このアルマの言葉（40 : 11）は、すべての霊が神のもとへ帰って平安な場所または罰を受ける場所に振り分けられ、神の前で個々の判決を受けるという意味ではない。『神のみもとへ連れ戻される』（伝道 12 : 7 と比較）とは単にこの世の人生が終わり、霊の世界に戻るとのことなのである。霊界では個々の業の正邪に従ってある場所に割り振られ、そこで復活を待つのである。『神のみもとに帰る』とは、よく知られているほかのいろいろな言葉の同意語である。例えば、ある男性が所定の期間、外国で伝道したとする。この男性は解任されてアメリカ合衆国に帰ると『うちはいいなあ』と言うだろう。でも、『うち』は実際にはユタ州かアイダホ州のどこか、または西部のどこかかもしれないのである。」（Answers to Gospel Questions, ジョセフ・フィールディング・スミス・ジュニア編, 全 5 巻 [1957 - 1966 年] 第 2 巻, 85）

大管長会のジョージ・Q・キャンノン管長（1827 - 1901 年）は、アルマは「霊が直ちに神の前に呼ばれることを言おうとしたのではない。アルマは明らかにこの言葉を文字どおり御前に帰るという意味では使っていない」と説明している（Gospel Truth: Discourses and Writings of President George Q. Cannon, ジェレルド・L・ニュークイスト選 [1987 年], 58）。

アルマ 40 : 11 - 15 死と復活の間の人の状態

• 次の説明は、死んでから復活するまでの間の人の状態を理解するのに助けとなる。「肉体が減んでも、霊は生き続けます。霊界で、義人の霊は『パラダイスと呼ばれる幸福な状態、すなわち安息の状態、平安な状態に迎え入れられ、彼らはそこであらゆる災難と、あらゆる不安と憂いを離れて休〔みます。〕』（アルマ 40 : 12）霊の獄と呼ばれる場所は『真理を知らずに罪のうちに死んだ者や、預言者たちを拒んで背きのうちに死んだ者』のために取っておかれます（教義と聖約 138 : 32）。霊の獄にいる霊たちは『神を信じる信仰、罪の悔い改め、罪の救^{ゆる}しのための身代わりのバプテスマ、按手による聖霊の賜物について教えを受け……知っておく必要のある、福音のすべての原則が教えられ〔まし〕た。』（教義と聖約 138 : 33 - 34）福音の原則を受け入れ、罪を悔い改め、神殿で行われる身代わりの儀式を受け入れるならば、パ

© 1985 ロバート・ハレット



ラダイスに来ることを歓迎されます。』（『真理を守る——福音の参考資料』82－83）

ブリガム・ヤング大管長（1801－1877年）の次の言葉を讀むと、霊界と神のみもの違いが理解しやすくなるであろう。「あなたはこの幕屋を横たえと、どこに行くのでしょうか。あなたは霊界に行くのです。アブラハムのふところに行くのでしょうか。違います。そのような所ではなく、霊界に行きます。霊界とはどこにあるのでしょうか。霊界はまさにここにあるのです。善い霊も悪い霊も一緒に行くのですか。はい、そうです。どちらも一つの王国に住むのですか。そのとおりです。太陽に行くのですか。違います。地球として組織された領域を超えた所に行くのですか。いいえ、違います。彼らが連れて来られるのは、この地球なのです。」（*Discourses of Brigham Young*, ジョン・A・ウィットソー選〔1954年〕, 376）

アルマ 40：16－22 第一の復活

・アルマは地上での時の経過に関連して「第一の復活」について語っている。イエス・キリストが最初に復活され、すぐ後に時の初めからキリストの復活までの間にこの世に生を受けて死んだ義人が復活する（アルマ 40：16, 20；教義と聖約 133：54－55 参照）。この復活が、アルマの言う「第一の復活」である。

・ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、第一の復活には2通りあり、その時期も内容も異なると説明している。

「キリストが死からよみがえられたときに大勢の人が復活したが、キリストの再臨のときに起こる義人の復活を第一の復活と呼ぶのが習わしである。わたしたちにとっては、これが最初である。なぜならわたしたちは過ぎ去ったことは考えず、考慮の対象にしていないからである。主は、再臨のときに墓が開かれ、正しい者は出て来て主とともに千年の間地を治めると約束された。……

キリストが来られるときに、『墓の中で眠っていた者たちは、彼らの墓が開かれるので出て来る。そして、彼らもまた、天の柱のただ中で主に会うために引き上げられる。彼らはキリストのもの、初穂、キリストとともに最初に降る者、地上や墓の中にいてキリストに会うために最初に引き上げられる者である。これはすべて、神の天使が吹き鳴らすラッパの音による。』（教義と聖約 88：97－98）これらの者は、『神とキリストが万民の審判者として住まわれる、天にその名が記されている』正しい人々である。『これらは、自らの血を流すことによってこの完全な贖罪を成し遂げられた、新しい聖約の仲保者イエスを通じて完全な者とされた正しい人々である。』（教義と聖約 76：68－69）

この大きな出来事に続き、主と、主に会うために取り上げられた義人が地上に降って来た後、もう一つの復活が起こる。これは少し遅れて起こるが、第一の復活の一部と考えることができる。この復活で、主に会うために取り上げられる資格はないが、よみがえって福千年の統治を享受する資格のある月の栄えの位に属する者が出て来る。（*Doctrines of Salvation*, ブルース・R・マッコンキー編, 全3巻〔1954－1956年〕, 第2巻, 295－297）

・十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老（1915－1985年）は「正しい者の復活」とも「命の復活」とも呼ばれる第一の復活について、次のように説明している。「この復活の朝に出て来る者は日の栄えの体をまとい、日の栄えの栄光を受け継ぐ。これらの者はキリストの初穂である。この復活の午後に出て来る者は月の栄えの体をまとい、したがってその王国を受け継ぐ。彼らは、このようにして出てきたときにキリストのものとなると述べられている。それまでに復活した者は皆、日の栄えの体を得ている。月の栄えの者が出て来るのは、再臨後のことである（教義と聖約 76：50－80；88：95－99）。」（*Doctrinal New Testament Commentary*, 全3巻〔1971－1973年〕, 第1巻, 196）

アルマ 40：23 「本来の完全な造り」

・十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、復活したら欠陥がなくなるという知識がもたらす慰めについて語っている。

「生まれつきの障がいを持った人や、生まれてからのけが、病気、加齢により困難を強いられている人が『本来の完全な造り』に復活できるとは、何という慰めでしょうか。……

復活への確信はわたしたちに力と広い視野を与え、わたしたち自身や家族が先天的、後天的を問わず抱える肉体的、精神的、情緒的障がいなどのこの世での試練に耐える力を与えてくれます。そうした障がいは復活までのほんの一時的



© 2000 デル・バーノン

なものであることが分かるからです。』（『リアホナ』2000年7月号、17－18）

・ジョセフ・F・スミス大管長（1838－1918年）は、肉体の損なわれた部分が復活のときにどうなるかについて次のように語った。「障がいはい取り去られ、欠陥は取り除かれるであろう。そして、男も女もそれぞれの霊の完成、神が最初に意図された完成に到達するであろう。神の相続人となり、イエス・キリストと共同の相続人となるために生まれてきた神の子である男女が、律法に従うことによって霊的にも肉体的にも完全な者となるのは神の目的である。神はすべての子らが完全な者となるための手段として律法をお与えになったのである。』（*Gospel Doctrine*, 第5版〔1939年〕、23）

アルマ 40：26 「悪人には恐ろしい死が及ぶ」

・次の説明を読むと、この「恐ろしい死」の意味するところが理解しやすくなる。「聖文には、ところどころに、第二の死からの救いについて触れた箇所があります。第二の死とは、義から断ち切れ、どの栄光の王国にも入ることのできない最終的な霊の死です（アルマ 12：32；教義と聖約 88：24 参照）。この第二の死は最後の裁きの時まで取っておかれますが、ごくわずかな人々しか受けません（教義と聖約 76：31－37 参照）。この世にかつて住んだほとんどすべての人々は、第二の死からの救いを保証されています（教義と聖約 76：40－45 参照）。』（『真理を守る』119）

アルマ 41 章 回復の律法

・今日の^{こんにち}の一部の人々と同じように、コリアントンは、だれもが復活の祝福を受けられるのであれば、義にかなった生活をするにどんな重要性があるのかと疑問に思ったかもしれない。アルマ 41 章は、このような疑問に答えている。

天の御父の子供が回復の律法の結果何を受けるかは、神の律法をいかに忠実に守ったかにかかっている。アルマがコリアントンに、「罪から幸福へ回復される」ことはない

説明したのはこのためである（アルマ 41：10 ）。これは収穫の法則と似ている。つまり、人はまいいたものを刈り取るのである（ガラテヤ 6：7；教義と聖約 130：20－21 参照）。アルマは息子に、「絶えず善を行いなさい。……再び善が報われるであろう。あなたから出るものがあなたに返って来て、回復されるからである」と述べている（アルマ 41：14－15）。

アルマはまた、回復の律法によって復活のときに体は完全な形に回復されることを息子に教えた。「霊は体に回復され、体は霊に回復される。……まことに、髪の毛一筋さえも失われること〔はない〕。」（アルマ 40：23）しかし、復活した体がどの栄光の階級に属するかは、各個人の忠実さの度合いによって決まる（教義と聖約 88：28－32 参照）。

アルマ 41：10 「悪事は決して幸福を生じたことがない」

・次の勧告では、福音の標準を守って生活することによって幸福になるよう努めることの大切さが強調されている。

「多くの人々は幸福と充実感を主の戒めに反する活動の中に見いだそうとします。彼らは自分たちのために立てられた神の計画を無視し、真の幸福をもたらす唯一の源泉を拒み、『自分のように惨めになることを求めている』悪魔に屈します（2 ニーファイ 2：27）。そして最終的にはアルマがその息子コリアントンに与えた警告が真実であることを悟るのです。『悪事は決して幸福を生じたことがない。』（アルマ 41：10）……

幸福になろうと努力するときに、真の幸福に至る唯一の道は福音に従った生活を送ることだということを覚えておいてください。戒めを守り、強くなれるよう祈り求め、罪を悔い改め、健全な活動に参加し、有意義な奉仕を行おうと努力するときに、安らかで永遠に続く幸福を見いだすことでしょう。愛ある天の御父が定められた境界を越えることなく楽しい時間を過ごすことができるようになるでしょう。』（『真理を守る』79－80）

アルマ 41：11－14

「公正に振る舞い、義にかなって裁き、絶えず善を行〔う〕」と、どのような報いを受けるか。

アルマ 42：1－10 「試しの時期」

・十二使徒定員会の L・トム・ペリー長老は、死すべき状態

と呼ばれる試しの時期の目的を説明している。「現世のおもな目的は、創世の前から存在していたわたしたちの霊が、この世において肉体と一つになり、成長するための機会にあずかることです。こうして、霊と肉体が一つになって初めて可能になる特権、すなわち成長や発達、成熟などの機会が与えられるのです。肉体を得たわたしたちは、試しの世と呼ばれる現世で、幾つかの試練をくり抜けます。現世は学びの時であり、永遠という機会にあずかるにふさわしいことを証明する、試しの時です。すべては、御父がその子供たちのために用意された、神聖な計画の一部なのです。」(『聖徒の道』1989年7月号, 15 参照)

• 七十人の会員として奉仕していたときに、ロナルド・E・ポールマン長老はこれに付け加えて、死すべき状態とは、反対の物事を学んでそのどちらかを選ぶ時期であると語った。「前世でわたしたちが受け入れた救いの計画には、地上での試しの期間が含まれていました。その間にわたしたちは、相反するものに遭遇し、選択し、その結果について学び、神のみもとへ帰る準備をします。その過程において、苦難を経験することは不可欠です。わたしたちはそれを承知のうえで、この世に来ることを選びました(2 ニーファイ 2:11 - 16 参照)。」(『聖徒の道』1989年7月号, 25)

• 七十人のウィリアム・R・ブラッドフォード長老は、死すべき世の目的は天の御父のようになることであると結論づけている。「この世の生活は試しの期間です。しかしその期間は、御子イエス・キリストの教えに従って、天の御父のようになることを学べるすばらしい時間の贈り物だとも言えるでしょう。主が導いてくださるのは煩雑な道ではありません。分かりやすく、まっすぐで、御霊^{みたま}によって明るく照らされた道なのです。」(『聖徒の道』1992年7月号, 33)

アルマ 42:11 - 31 正義^{あわ}と憐れみの律法

• 十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、救い主の犠牲のおかげで、正義の律法を犯すことなく人に憐れみが及ぶようになったと説明している。

「わたしたちは皆一種の霊の負債を負って生きています。いつか勘定が打ち切れ、清算をしなければならない日がやって来るでしょう。今は気に留めなくてもそれでよいかもしれませんが、やがて、決算日が来て、抵当権の行使を迫られます。そのときわたしたちは泣きながら、だれか、だれでもいいから、助けてくれる人を探さなければならないのです。」

永遠の律法によれば、わたしたちの負債を引き受け、その代価を払いかつわたしたちの贖い^{あがな}の交渉をしてくれる人がいないかぎり、憐れみは及ばされないのです。

もし仲保者がいなければ、また友人がいなかったならば、

正義の要求する無情の厳しい重荷はすべて、間違いなく、わたしたちの身に降りかかるのです。すべての違背に対する完全な償いは、その大きさや程度は違っても、最後の1コドラントを支払ってしまうまで要求されるのです。

榮えある真理は、仲保者の存在を次のように宣言しています。

『神は唯一であり、神と人との間の仲保者ただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。』(1 テモテ 2:5)

仲保者キリスト・イエスを通して、永遠の正義の律法を犯すことなしに、憐れみが一人一人に完全に及ぶのです。

この真理は、キリスト教の教義の根本です。……

憐れみはだれにでも自動的に及ぶというものではありません。主との聖約を通して及ぼされるのです。憐れみは主の条件、主の寛大な条件に従って初めて与えられるのです。そして、その条件として絶対に欠かせないのが、罪の赦し^{ゆる}を受けるために水に沈めるバプテスマです。

人は皆正義の律法による保護を受けることができます。またそれと同時に、一人一人が憐れみのもたらす贖い^いと癒しの祝福を受けることもできるのです。」(『聖徒の道』1977年10月号, 487 - 488 参照)

• ニール・A・マックスウェル長老は、次のような深い洞察を示す言葉を語っている。「神の正義と憐れみは完全ですから、最後の裁きのときには、かつては神の正義や憐れみに、また現世で与えられた環境に疑問を差し挟んだ人からも、不平はまったく聞こえません(2 ニーファイ 9:14 - 15; アルマ 5:15 - 19; 12:3 - 14; 42:23 - 26, 30 参照)。」(『リアホナ』2000年7月号, 88)

アルマ 42:18 - 30 良心^{かしやく}の呵責

• ボイド・K・パッカー会長は、良心の呵責が時には大切な役割を果たすと説明している。

「これから、罪悪感によって心に嫌な気持ちを強く感じて



いる人々の苦痛を和らげることを目的にお話ししたいと思います。今わたしは、『ここが少し良くないようですね……』と言って診察を始める医師のような気持ちでいます。

わたしたちは皆、過ちを犯した後に良心の痛みを多少なりとも感じた経験があります。

ヨハネはこのように述べています。『もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない。』(1ヨハネ1:8) ヨハネはさらに強い口調でこう述べています。『もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない。』(1ヨハネ1:10)

わたしたちは皆時々、何か悪いことを行っただけで、または何かを行わなかったために、良心の呵責にさいなまれます。中にはこれを何度も感じている人もいるかもしれませんが。わたしたちは肉体に痛みを感じますが、同じようにこの罪悪感は霊に受けるものです。……

わたしたちは皆、過ちを犯します。時には自分を傷つけ、そして自分だけの力では取り返しのつかないほどひどく他人を傷つけることがあります。物を壊して、自分の力では元どおりにできないことがあります。すると、わたしたちは天性のゆえに罪悪感や恥ずかしさを覚え、自分の力だけでは癒すことのできない苦しみを味わいます。そのときに贖罪の持つ癒しの力が助けてくれるのです。

主は言われました。『見よ、神であるわたしは、すべての人に代わってこれらの苦しみを負い、人々が悔い改めるならば苦しみを受けることのないようにした。』(教義と聖約19:16) (『リアホナ』2001年7月号, 25-27 参照)

● スペンサー・W・キンボール大管長 (1895 - 1985 年) は、敏感な良心を持つことの大切さについて語っている。「わたしたちが良心と名付けている敏感でしかも強力な道案内を神が授けてくださっていることは、何とすばらしいことではないか。『良心は人を救いに至らせるために、神が各人に与えられた神聖なひらめきである』という実に適切な言葉がある。確かに良心は、罪に目を向けさせ、改めようとする決意を促し、自分の犯した過ちを言い訳したりせずにそのまま受け入れ、進んで事実を直視し、結果を受け止め、必要な罰を受けさせるものである。このような心の状態になって初めて、人は悔い改めを始めたことになるのである。罪を悲しむことは悔い改めに近づいたことであり、悪い行いをやめることは悔い改めの始まりであるが、その人が良心に駆り立てられて問題に取り組むまでは、換言すれば言い訳や正当化が見られるかぎり、赦しへの道を歩き始めることができないのである。これが、アルマが息子のコリアントンに、『心か

ら悔い改める者のほかにはだれも救われない』(アルマ42:24) と言った意味である。』(『赦しの奇跡』158)

アルマ42:23 贖罪は復活をもたらし

● ゴードン・B・ヒンクレー大管長 (1910 - 2008 年) は、復活を可能にした贖いの犠牲のすばらしさについて、次のように証している。



「主の愛はすべての人々のために犠牲としてその命を与えてくださった、主の死という比類ない形で表されました。言葉に表すことのできない苦痛の中で行われた贖罪は、歴史上最も偉大な出来事、つまり何もささげるもののない人間に恵みとして、過去から未来にわたってこの地上を歩む

すべての人に対して復活の約束を授けてくださった出来事なのです。

人類史上これに比肩し得る出来事はありません。比べられるものはないのです。全人類のための自己を顧みない、無条件の愛、それはすべての人類種族への比類なき慈悲の業となったのです。

そしてあの最初の復活祭の朝、不死不滅の勝利の宣言がこだまします。これがパウロのその絶妙な言葉です。『アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。』(1コリント15:22) 主はすべての人に復活の祝福を授けられたのみならず、主の教えと戒めを守る人に永遠の命の扉を開かれたのです。』(『リアホナ』2000年1月号, 87)



アルマ42:27-30

これらの節では、選択の自由と責任にはどのような関係があると言われているか。

理解を深めるために

- 罪惡が幸福を生じることがないのはなぜだろうか。悪い人々が幸福そうに見えることがあるのはなぜだろうか。
- 救い主の贖罪しよくざいの恩恵にあずかるためには、何をしなければならぬだろうか。
- 正義の律法はあなたのためにどのように働くだろうか。
- 憐れみの律法はあなたのためにどのように働くだろうか。

割り当ての提案

- アルマ 40 - 42 章からの引用を 2, 3 使って、「霊界」というテーマの短い話を準備し、可能であれば発表する。
- アルマは息子コリアントンに復活についてどんなことを教えただろうか。
- 次のそれぞれの語句の定義あわ、または説明を簡単に書く。回復の律法、正義の律法、憐れみの律法。